

犯罪心理学と命

力動的な心理療法家としての立場から

茂木 洋（四天王寺大学）

- ふたつの象
- 物的現実と心的現実
- 私の体験～篤志面接委員として
- 扱えているつもり
- 性（生）に対する構え
- 対象者にとっての難しさ
- 解離を生じやすい構造において

ふたつの象

- 犯罪心理学と命というふたつの対象
- どのように結びつけるかが定式化されていないテーマ
- どのような距離感でとらえていくか

物的現実と心的現実

- 客観的説明（物的現実）と主観的体験の枠組み（心的現実）
- バランス感覚
- 環境要因としての犯罪処遇フィールド
- 現実的要請と現実的取り組み⇔心的理解のための精神活動

私の体験～篤志面接委員として

篤志面接について

- 矯正施設の収容者が持つ種々の問題の解決を図り、あるいは教養や趣味を向上させることなどを目的として、民間の篤志家はその専門的知識や経験に基づいて行う、相談助言、各種指導等を指す。
- 様々な領域の専門家が受刑者や少年院在院者等に関わっており、その内容は多岐にわたっている。少年院の篤志面接活動で最も多く行われているのは「精神的煩悶の解消」といわれる、いわゆる心理的な悩みの相談。

扱えているつもり

- 死を扱う難しさ
- 性を扱う難しさ
- 考えない（考えられない）という心理的な死

性（生）に対する構え

- 児童福祉施設における“性問題”
- 性の問題なのか生の問題なのか
 - 性化行動
 - スタッフ自身の性（生）に対する構えが問われる
 - 自分と関連づけて考え、扱うことができるか
- 性について語ること
 - 性を意識的に扱うことの意義
 - ひそやかなものという感覚の喪失 “身も蓋もない”
- スタッフの性が力動的にどのように作用するかという視点

対象者にとっての難しさ

- 目前の関係から性を意識的無意識的に排除／隠ぺいする
- 目前の関係から生を意識的無意識的に否認する
 - 人間性、人間的にかかわりの否認と渴望
- 死を象徴的に取り扱うことが難しくなる体験
 - 物的現実の死
 - 「死ぬ気でやる」「命がけ」「死にそう」「殺すぞ」…
 - 内的な意味 < 現実的な意味

解離を生じやすい構造において

- メンタライジング（自分を含む人の行為を、こころの状態と因果関係をもつものとして解釈する過程、その能力）がバランスよくできること
- そのうえで、対象者が他者とのかかわりの中で充分連想できること、その内容を語れること、その語りを通してさらなる連想が働くこと